ジブラルタルからピレネーまで

—スペイン民主化の歩み—

永　川　玲　二

1　生きのびる技術

スペインの独裁者フランシスコ・フランコは1975年の秋、首都マドリーの病院で波瀾万丈の生涯を終え、国家元首として盛大に葬られた。むかし彼の同志だったヒットラーとムッソリーニがどちらも悲惨な死にかたをしたあと、フランコだけが悠然と、さらに30年間も独裁権をたもちつづけたわけである。市民戦争のはじめに彼が植民地モロッコで叛乱の旗をかかげ、手勢をひきいてジブラルタルを渡ったときから数えると、ほとんど40年にちかい。今世紀のヨーロッパ社会が生み育てた多彩な独裁者群像のなかでも、しぶとく土俵に踏みとどまる二枚腰にかけては東の横綱スターリンをすら凌いだ。まさに第一人者である。

フランコ体制はいったいなぜそんなに長つづきしたのだろう？　市民戦争が終ったときピレネーの北へと亡命した共和国派（約50万人）のなかには、遠からずまた帰国してフランコを倒す機会がくると信じていたひとも少なくない。しかしわずか半年後に第二次大戦の大波が彼らの夢を押し流した。フランスはあっけなく降伏し、逃げ場をうしなった多くのひとが迫害を覚悟のうえで帰国したり、強制収容所に入れられたり、メキシコ、アルゼンチンなどに再亡命したりする。それでも同じかフランスに残ってレ

ジスタンスに参加した共和国軍のベテランたちは、おもに南仏一帯でナチの警察やヴィシー政府とたたかいながら、ふたたびピレネー国境を越える日を待ちつづけていた。

サハラ砂漠とスターリングラードでドイツ軍が大敗した1943年ごろから、スペイン国内でも反フランコ派が勢いづく。市民戦争いらいずっと国内各地の山奥や工業都市にひそんでいたゲリラは活発に動きはじめ、南仏からはレジスタンスの闘士たちがピレネー中央部の谷間ぞいに一気に南下しようとする。市民戦争開始当時の情勢が、ちょうど南北異がえしに再現しかねないかたちである。

ヒットラーが倒れたときフランコ政権は国際社会のなかで完全に孤立した。アイゼンハワーの連合軍はすぐスペインに攻めこむかもしれない、すくなくとも反フランコ派を応援して独裁政権をつぶすだろう、と期待したひとが多かったし、はじめのうちは確かに天下の大勢もそちらの方向に流れていた。米英ソ三国の首脳はポツダム宣言のなかで、大戦中の中立国にはすべて国連加盟資格を認めながら、フランコのスペインだけを例外とみなし、わざわざこんな但し書きをつけくわえる。「枢軸諸国の援助のもとに成立したスペイン政府は、その起源、性格、経歴、侵略勢力との親密な関係などからみて国連加盟に必要な条件をそなえていないから、同政府によるいかなる加盟努力をも支持しないことを明言せざるをえない。」これよりまえ、サンフランシスコでひらかれた第一回国連会議がすでにフランコ弾劾を決議していたから、ポツダム宣言はさらにそれに念を押し、とどめを刺したことになる。

こうした情勢に呼応して、メキシコで名乗りをあげた共和国亡命政府は本拠地を南仏トゥールーズに移すことにきめた。ポルトガルに集まっていた王党派はスペイン国内の同志たちに王政復古の早期実現を呼びかける。1946年2月にフランス側から潜入して捕えられた数人のゲリラが銃殺されたとき、ビドー内閣は世論に押されてピレネーの国境閉鎖に踏み切った。まもなく国連総会もマドリー駐在の外交官総引きあげを加盟各国に勧告する。フランコはいよいよ四面楚歌。ムッソリーニとおなじような末路に近ずいた感じだった。

しかしフランコはこの窮地から案外簡単に脱け出してしまう。彼にとって何よりも大きな幸運だったのは米ソ関係の険悪化である。鉄のカーテンを境いめにヨーロッパぜんたいが敵・味方にはっきり分裂するにつれて、

いままでナチの仲間として忌み嫌われていたフランコも、反共主義者であるという一点だけで西側にとっては利用価値の高い将棋の駒と化す。1948年2月にフランス政府は国境閉鎖を解除した。11月には、はじめてスペインを訪れたアメリカ軍事使節団がこんな声明を発表する。「共産主義に反対するすべてのひとびとは、スペインを国連に加盟させることの利点を理解せねばならぬ。」翌年4月に北大西洋条約機構（NATO）が結成されると、アメリカの議会や財界でもフランコとの提携強化をはかる動きがめだつようになった。

こうした方向転換がはっきり表面化するのは1950年の夏。その直接のきっかけは朝鮮戦争の突発だった。おりからワシントンにいたフランコ政府の使節団は素早くこの機会をとらえ、「スペインはUSAと協力して共産主義を阻止するため、朝鮮に兵力を派遣したい」と声明する。まもなくアメリカ上院では大戦後最初の対スペイン経済援助（総額約9千万ドル）をふくむ相互安全保障法案が可決された。おかげでフランコ政権は破産寸前の危機をまぬがれ、内戦いらい13年もつづいていた食糧配給制度を廃止するなど、経済的にも政治的にもやっと立ちなおることができた。反フランコ派のひとびとにとっては、雌伏10年の夢がこれでほぼ完全に消えてしまう。国内のゲリラはいたるところで虱つぶしに殲滅され、ピレネーの谷間でもレジスタンスの闘士たちが山賊同様に狩りたてられて死んで行った。

1950年の秋、中国軍が鴨緑江を越えて南下した翌日に国連総会はスペインとの外交再開を決議した。諸外国の大使たちがまたマドリーに帰ってくる。ついにフランコは、天下晴れて国際社会に返り咲いたわけである。亡命政府のほうはもちろん意気消沈。社会党々首ブリエートは引責辞職の決心をかため、次のような辞任の弁を発表した。「私は完全に失敗した。私のせいで社会党は民主陣営列強の政府を信じこんでいたが、いまや彼らは信頼にあたいしないことが証明された。わが党がこんな虚しい幻想の犠牲になってしまったのは、ひとえに私の不明のいたすところである……」

第二次大戦前後からこの時期までの国際情勢を振り返ると、共和国の残党たちはまことに運が悪かったし、フランコはまことに幸運だった。しかし彼の政権が長つづきした原因を、すべて単なる偶然や国際環境のせいにするのは片手落ちな見方だろう。それを可能にした条件はやはり市民戦争後のスペイン社会のなかにあったにちがいない。

最初に思いあたるのは、血で血を洗う内戦の悲惨な結果がもたらした戦

労困憊と無気力である。共和国側の政治家、知識人、軍人などの生き残りはほとんどが国外に亡命し、時とともに故国の実情にうとくなる。国内にとどまった連中も投獄されたり処刑されたり、容赦なく弾圧されたりして手も足も出なかった。農民や労働者の大部分は、荒廃しきった国土のなかで飢えをしのいで生きのびるのが精一杯。どんなに不当な目にあおうと、内戦のあの悪夢だけはもう二度とくりかえしたくないという気持のほうが先にたつ。食糧の配給制度が廃止される1951年ごろまでは、ほんのときたまストやデモがおこっても、せいぜいそれは北のほうの孤山地帯か都会だけの局地現象にすぎなかった。

フランコ側について言えば、彼らは内戦の勝利者としてすべての権力を独占し、しばらくのあいだ表面的には一致団結をたもっていた。しかし内側の事情をみると、利害関係も主義主張もそれぞれ千差万別の諸党派の寄りあい世帯である。ナチやファッショの同伴だったファランヘ党、第二共和国以前の旧体制への復帰をめざす王党派、むかしながらの教会制度を守ろうとするカトリック諸派、など。みんなが味方どうしだった内戦の記憶が薄れるにつれて、ことあるごとに険しく反目対立して縄張りあらそいをくりかえす。

フランコは彼らの内輪もめを巧みにあやつることによって、着々と自分の独裁権を強化した。もともと彼はヒットラーやムッソリーニとちがって、イデオロギーには無関心な典型的職業軍人だし、彼の弟ラモン・フランコの表現を借りれば「利害得失の計算がおそろしく確かな現実家」である。必要とあればどんな党派でも人物でも手なづけて使うが、不必要になればさっさと切りすてる。そうした変り身の早さのおかげで彼は国際情勢の流れにも機敏に対応し、わずか七、八年のうちにヒットラーの同志からアイゼンハワーの友人へとものみごとに変貌してしまった。この両巨頭のどちらとも笑顔で抱きあっている写真を後世に残した国家元首が、ほかにだれかいただろうか？

第二次大戦の末ごろから彼はナチの味方というイメージを修正するために、法王庁との古い友好関係をさらに深めることにした。それにはさしあたり外務省、文部省など関連部門のスタッフを、ファランヘ系からカトリック系へと大幅に入れかえる必要がある。この政策の一環としてフランコは若い自然法学者ルイス・ヒメネス（現護民官）を起用し、次々に大きな難かしい仕事を任せるようになった。

1948年にルイスはヴァティカン駐在大使になり、教会との連帯強化のための新協定づくりを担当する。この交渉が行きづまっていた最大の原因は、信教の自由の問題だった。フランコ政府がアメリカの経済援助にありつくには、プロテスタントの布教を公認せねばならぬ。米英両国をはじめとして世界の世論がそれを要求しているし、ときの大統領トルーマンは熱烈な浸礼派信者である。しかし法王庁のほうは、スペイン唯一の国教という既得権を無慎で手放すつもりはない。やむをえずフランコ政権は信教自由化と引きかえに、教育、財政などの面でカトリック教会の特権を思いきりひろげることにした。

教育やジャーナリズムの分野でいつも教会と主導権をあらそっているファランヘ党は激昂して、そんな譲歩は国辱だと騒ぎたてる。悪いのはもちろんフランコではなく、側近にいるカトリック派、とくに外相やヴァティカン駐在大使である。したがって1951年にルイス・ヒメネスが帰ってきて文相に抜擢されたとき、ファランヘ系の教育関係者や新聞雑誌ははじめから露骨な敵意を示した。

それを配慮したせいか、彼はマドリー、サラマンカ両大学の学長をはじめ、おもなポストにはファランヘ系の若い学者を起用するなど、なるべく摩擦のすくないかたちで徐々に学界と教育界の空気を入れかえようとする。市民戦争以前の世代の哲学者や作家のうち、危険思想視されていたひとびとの名誉回復をはかるにも、比較的ファランヘ党に受けのいいウナムーノ、オルテガ・イ・ガゼットあたりを最初にとりあげることにした。こうした政策のせいで、こんどはカトリックの保守派がルイス・ヒメネスを目のかたきにしはじめる。1955年末にマドリー大学で内戦後はじめての大規模な学園紛争がおこったとき、彼はカトリックとファランヘと、両側から集中攻撃を浴びて辞職せざるをえなくなった。国際情勢の変化にあわせてフランコ政権のイメージを急いで修正する作業のなかで、正義漢ルイス・ヒメネスの役割はここで終ったと言えるだろう。

しかしもっと長い目で見ると、彼のまわりでまきおこったさまざまな波紋はこれ以後にも四方八方にひろがって、微妙なところで少しづつ社会の体質を変えはじめる。たとえば文相辞職のころから、体制内で反目する諸勢力の分布図が、にわかに曖昧なものになった。ルイス・ヒメネスの支持層と反対層との境界は、既成の党派別ではなく、どの集団のなかにもある複雑な割れ目を縫って走るジグザグの線である。新派と旧派、正統と異端、

譲歩と開国、政治と文化、等々。閣僚会議でも教授会でも、意外な人物が意外な理由でそれぞれ彼を熱烈に弾劾したり弁護したりするので、だれが敵だか味方だか見分けがつきにくくなった。

ましてそのころ大学にいた青年たちの大部分は、すでに市民戦争についての記憶のない世代である。体制内の派閥どころか、フランコ派と共和国派の区別ですら、彼らにとっては親たちの世代が勝手に染め別けた不恰好なお仕着せにすぎない。彼ら自身にぴったりの思想や党派があるとすれば、それは目のまえでおこっている学園闘争のなかから生まれてくるだろう。〈56年の世代〉と呼ばれる当時の学生仲間には、フランコ死後から現在までスペイン民主化の過程のなかで活躍しているひとが多い。

2　ふたつのスペイン

56年の世代の反体制運動の発火点になったのは、マドリー大学の学生たちの文化サークルだったらしい。シネ・クラブ、詩の朗読会などの行事がおわったあと、すぐに活発な討論がはじまり、話題は文学、芸術から表現の自由へ、政治へとはてしなくひろがってゆく。のちにユーロコミュニズムの代表的論客になったラモン・タマーメスの回想によると、ある日彼が自分で書いて掲示しておいた朗読会のポスター「詩（poesia）と大学との出会い」を、だれかが勝手に修正して「警察（policia）と大学との出会い」にしてしまった。その後まもなく激しい学園闘争がはじまったことを考えると、これはまことに予言的ないたずら書きだったという。

闘争の末期にタマーメスらといっしょに逮捕、投獄されたエンリーケ・ムヒカ（現社会党中央委員）は、当時の学園の雰囲気についてこう語っている。「あのころ大学には左翼学生なんてほとんどいなかった。なにしろフランコの全盛期だったから。一方ではファランヘ系の学生が、青年隊なんて組織をつくっていたが、王党派もいたし、まあ何人かはリベラルとか、デモクラットとか、進歩主義左派とか……。みんなの唯一の共通点は溜まり場でね。大学の裏手の中庭に面した喫茶部にファランヘも非ファランヘも、リベラルも王党派も、寄ってたかってしゃべっていた……」

ムヒカはバスク海岸の都市サン・セバスティアンに住むユダヤ系毛皮商人の息子である。少年期からすぐ近くの国境を越えてフランスに行ったり、サルトルらの雑誌を読んだりして、パリ文化の雰囲気や思想論争に慣れて

いた。だから、マドリー大学に入ったときには、まるで別の天体に飛び移った思いだったという。法学部や文学部の学生が、ほとんどだれも外国ものを読んでいない。かなり開けた連中でも、せいぜいオルテガ・イ・ガセットら〈98年の世代〉と、ガルシーア・ロルカなど〈27年の世代〉の国粋派憂国思想どまり。もっと広い視野に立つ左翼の組織などどこにもない。しかし入学した翌年に、そうした雰囲気をかきみだす奇妙な事件がおこった。

イギリス女王エリザベス二世が英領ジブラルタルを訪れたとき、マドリーの学生たちは大挙してイギリス大使館に押しよせ、「ジブラルタルはスペインだ！」とシュプレヒ・コールをくりかえした。このデモを組織したのはフランコ政権御用のファランヘ系学友会である。ところが不意にその現場に騎馬警官の一隊があらわれ、デモ隊をさんざん蹴散らしはじめた。「われわれは一生あれを忘れない。政府にあやつられていることに、はじめてあのとき気づいたんだ」と、これは当時そこにいたひとたちが30年後の現在でも異口同音に洩らす感想のひとつである。

ムヒカはその後共産党に入ったが、何回めかの投獄中に同志と激論をたたかわしたあげく、脱党してやがて社会党に参加した。ごく最近（86年1月）に社会党政府はアラブ諸国への一辺倒をあらためてイスラエルと外交関係を結んだが、この政策の推進力になったのはユダヤ系商人の息子ムヒカである。

ムヒカに関してもうひとつ注目にあたいするのは、彼がバスクで生まれ育ったことだろう。遠いむかしからスペインは言語、風俗、産業など、さまざまな面で極端に地域差のはげしい国である。中央部のカスティージャ高原から、西部（ポルトガル国境ぞいのガリシア、レオン、エクストレマドゥーラ）、南部（アンダルシーア、ムルシア）にかけては九割五分までが農村部で、生活は貧しく、文盲が多い。アントニオ・マチャードの沈痛な詩句を引用すれば、「みじめなカスティージャよ　きのうまでの支配者がぼろをまとい　自分の知らないことはみんな軽蔑する」つまり近代文明から取り残された地域である。西欧の市民革命とも、産業革命とも縁がなかったため、いつになっても活発な中産階級が育たない。とくにアンダルシーアなどは、農奴なみの日傭い労務者の大群と、ごく少数の大地主との中間がほとんど空白状態だった。この環境のなかで根をおろすイデオロギーは、徹底した無政府主義か保守反動か、どちらかの極端だけ。対話や妥協の可能性はどこにもない。ふたたびマチャードの詩句を引けば——

これからこの世に生まれてくる
スペインの子よ　おまえに神の御加護あれ
ふたつのスペインのどちらかひとつが
おまえの心を凍らせてしまう

これに対してピレネー東部地中海岸のカタルーニャと、西部大西洋岸のバスクとは、どちらも工業地帯だし、それぞれ同一言語圏がフランス領内まで延びている。経済的にも文化的にも近代西欧の一部である。しかも中世末期までどちらも独立国だったという歴史がいまだに尾をひいて、住民たちの大部分がカスティージャの中央権力には根づよい不信、反感をいだきつづけている。市民戦争以後はじめてのストはここでおこったし、労働者階級だけではなく、広範な中間層がそれを支持、応援した。フランコの分割統治策が通用しにくい地域である。反体制のさまざまな動機が手をつないで、ここからスペイン全土へと徐々に連鎖反応をおこす。

1939年夏のある日、バルセローナの大新聞「ヴァンガルディア」の編集長がたまたま教会に立ち寄ったら、そこの司祭はラテン語でもカスティージャ語でもなく、禁じられているはずのカタルーニャ語でミサを唱えていた。編集長のほうはフランコ直系のカスティージャ中心主義者だから、これを聞いて憤慨し、聖器室にとびこんで頭ごなしに怒鳴りつけた。カタルーニャのやつらはみんな糞ったれだ、とまで口走ったという。

この噂がひろまるにつれてカタルーニャ全土で自治要求の市民運動が燃えあがり、地元の商店や大企業も「ヴァンガルディア」には広告を出さないことにした。新聞社主は追いつめられ、ついに編集長を首にする決心をかためたが、それには政府の承認を要する。（フランコは世論操作を重視して、新聞雑誌の編集長にはかならず自分の腹心を、任命することにしていた。）あれやこれやで手間どっているうち新聞社が襲撃され、暴動寸前の状態になった。

マドリーではさっそくこの問題が閣議の席でとりあげられたが、なにしろ当の編集長はフランコの新聞政策の大黒柱ともいうべきファランヘ系の功労者である。閣僚たちが困りきっていたとき、黙って聞いていたフランコがあっさり救いの舟を出した。「別に問題はないだろう、彼が提出した辞表をいますぐここで受理すればそれで済むんだから」と。実際には編集

長はこのときまだ辞表を書いていなかったし、書く意志すらないと公言していたけれども、独裁者の鶴の一声で何もかも別に問題なく、円満解決することになった。

いかにもフランコらしい変り身の早さだが、この決断の背景にはカタルーニャ、バスクの反体制運動が、すでに弾圧一本槍ではおさまらなくなってきたという事情がある。翌年の春フランコがバルセローナに行ったとき、地元の財界の有力者ジョルディ・プジョール〔現カタルーニャ自治政府首相〕らは激烈な反フランコのパンフレットをつくり、逮捕されて軍事法廷に立ってからも懲刑の誘惑をしりぞけてカタルーニャ自治を要求した。5月末にはバスクの司祭339人が連名で警察の弾圧、拷問にたいする抗議書を発表し、「人間の尊厳についてのカトリックの教義と、公式にはカトリックを自称する政府がそれを尊重していないこと、しかもスペイン教会首脳部がはっきりその政体を支持していることとのあいだに存在する矛盾」を指摘した。地元バスクで生まれ育ち、教区民の実情をよく知っている下級聖職者のこの声には、やがてラテン・アメリカの独裁政権下で根をひろげる解放神学さながらのひびきがある。

これからまもなく教会とフランコ政権との関係は、第二回ヴァティカン公会議をきっかけに急激に悪化しはじめた。社会正義、信教の自由、教会改革など、ヨハネ二十三世の新方針のおかげでスペイン教会首脳部でも進歩派が勢いづき、保守派の反対を押しきって露骨にフランコを批判する。マドリーにいる枢機卿や各地の司教の何割かがバスク、カタルーニャの司祭たちと手をつないだわけである。こうして教会内部にも新らしいジグザグの割れ目がひろがり、独裁制をささえている三本の柱――軍隊、教会、地主貴族――の二本めが怪しくなってくる。三本めの地主階級もやはりそのころ次第に力を失いつつあった。

アメリカの経済援助がはじまった1950年代以後、商工業が活気づくにつれて農村から都会へと労働人口が流れだす。60年代にはピネーの北の国々への出稼ぎがこれに拍車をかけ、スペイン全土が民族移動の大波にまきこまれることになった。70年に私がはじめてセビージャに住みついたころには、アンダルシーアからの出稼ぎ人口は合計160万人。そのうち70万以上がバルセローナに住んでおり、クリスマス休暇になると満員の列車で郷里に帰ってくる。まるで辺境の過疎農村と、工業地帯の大都市とが新らしい大きなコンベア・ベルトでつながっている感じだった。しかもそのベ

ルトはさらにフランスへ、西ドイツへと伸びており、何十万もの若い労働人口を毎年せっせと運び出す。逆に北の国々からは夏ごとに何百万かのバカンス客が太陽いっぱいの海岸に押しよせ、惜しげもなくフランやマルクをまきちらす。農村と都市との溝どころか、ピレネー国境の峠までが簡単にまたげるようになった。

この大移動は経済面ではおそらくフランコ政権にとって、ポツダム宣言につぐ第二の大きな幸運であったろう。移民労働者の仕送りと観光収入のおかげで対外収支は楽になるし、大量失業や貧困にも出稼ぎという排けロができた。その反面では、しかし農村部の過疎化によって地主貴族の地盤がくずれ、もっとリベラルな商工業者が実力をつけたり、労働組合の組織がひろがったり、独裁政権にとっては危険な社会変動がおこる。オルテガの言う〈無脊髄のスペイン〉に育髄らしきものができ、〈ふたつのスペイン〉の境い目もはっきりしなくなってきた。帰郷する移民労働者と観光客の大波がありとあらゆる新風俗、新情報をもちこんで文化的鎖国の壁を破ろうとしている。それを食いとめることは、どんな絶対権力にとっても不可能にちかいだろう。

3　若い世代

フランコが死んでからちょうど2年後の1977年12月に、社会主義インターナショナル首脳会議が東京でひらかれ、スペインからは野党々首フェリーペ・ゴンサーレス（現首相）が参加した。そのとき彼とのインタヴューの席で、最初に私はこんなことを尋ねてみた。

フランコ死後、わずか2年のうちにスペイン社会は大きく変った。ターデターも内乱もなく、これほど早く民主化が実現するとはだれも期待していなかったのではないか？

欧米の新聞なども奇蹟だと書いている。しかし私は奇蹟だとは思はない。なぜならスペイン社会では、フランコ時代の末期にすでに実質上の民主化が着々と進んでいた。労働運動では独裁政権がつくりあげた御用組合は力を失い、非公認の「労働者委員会」（コミッショーネス・オブレーラス）はストライキなど強力な闘争を組む実力をもっていた。また、それを支援する非合法の政党も健在で、これらを許容することが社会的風潮となっていた。つまり、スペイン社会は基本的にはヨーロッパの先進工業国とおなじ体質になっていたわけだ。したがって、フランコ死後の急激な変化は未知の世界への跳躍ではなかった。社会そのものが変化していたにもかかわらず、その上に乗り、社会を支配する政治体制だけが、時代遅れの独裁体制であったわけだ。したがって、問題は体制を社会に適応させるということだけだ。こうした事態の当然の結果として、政治体制の交代も特殊な様相を帯びた。

きわめて漸進的な推移と言えるようだが？

そうだ。旧体制をターデターで一挙に倒したポルトガルの政変とはちがう。スペインでは古い独裁体制を徐々に清算しながら、同時に一方で新らしい民主体制を築きあげていかなければならない。こうした漸進的変化の過程で起こってくる事態はターデターほど悲劇的ではなく、スムーズであるかわりに、いっそう複雑微妙だ……〔後略〕

このときフェリーペ・ゴンサーレスはまだわずか35才の若さである。野党々首というよりも、労働問題にうちこんでいる新進気鋭の弁護士といった印象のほうが強い。その彼がいったいどんないきさつで社会党の最高責任者になったのやら、私には想像もつかなかった。

マドリーの学園紛争から5年あまりたったころ、彼はセビージャ大学で法律を勉強しながら、カトリック進歩派のグループに加わっていたらしい。たまたま1962年に情報観光相マヌエル・フラーガ（現保守党AP党首）がセビージャをおとずれ、法学部の大教室で講演会をひらいた。冒頭で彼が長々とヨーロッパ諸国の政情を説明していたとき、学生のひとりが「外国のことよりスペインの話をしてほしい」と発言した。フラーガが拒絶したのをきっかけに、満場騒然となってしまう。学生たちが彼をファシスト呼ばわりしたり、みんなで合唱をはじめたり、警官隊との乱闘がはじまったり。これがアンダルシーアでは最初の学園紛争の発端となった。

このときからゴンサーレスは社会党系のグループに接近し、その中心人物だったアルフォンソ・ゲッラ（現蘭首相）らと親交をむすぶ。文学部にいたゲッラはもともと熱烈な演劇青年で、政治に関心をもちはじめたのも芝居がきっかけだったという。同好者の小さなサークルで何かを上演するためには、いちいち情報観光省セビージャ支所に出頭して許可をもとめねばならない。検閲官は文学など何も知らない人物で、とっくに死んだ有名作家をこの役所に連れてこいと要求したり、外国ものをやりたがるのは愛国心がない証拠だと長い説教をしたりする。こんな理不尽な世の中を何と

か変えるために、彼は友人先輩と相談して〈青年社会党〉なるものをつくった。フランスにいる亡命者たちの党本部からも、マドリーの地下組織からも遠く離れたアンダルシーアの一角で、まったく自然に芽を吹いた雑草同然のグループだが、これが次第に根をひろげ、まわりの別の党派にいたゴンサーレスのような同志をつつみこみながら新らしい養分をたくわえて、10年あまりのちにはスペイン社会党の中心勢力になってしまう。

しかしそれまでの成長過程はやはり茨の道であった。1966年に南仏トゥールーズで討論会があったとき、26才のゲッラは自費で参加して、はじめて党の長老たちと対面したが、たちまち激論になってしまう。亡命生活27年の孤独のなかでイデオロギーや派閥あらそいに熱中し、いまだに国際情勢の好転を夢みている長老たち（歴史派）と、国内で地道な地下活動をつづけている若い世代（改革派）との溝はあまりにも深い。その後もやはりトゥールーズで2年おきにひらかれる党大会のたびに、両派の対立はますます険悪になって行った。

70年の大会ではゴンサーレスが党首ジョービスと大論争をくりひろげ、党の方針は国内できめるべきだと主張して多くの参加者の共感を呼んだ。72年には形勢不利とみた歴史派が、改革派とは別々に集会をひらこうとしたため、喧嘩わかれのかたちになる。74年10月の大会はパリ郊外のシュレーヌに舞台を移したが、開催準備の段階からすでに緊迫した雰囲気がみなぎっていたという。

改革派の代表たちはパリへと出発するまえに、バスク国境の港町フェンテラビーアに集合した。バスクは当時社会党系の労働組合UGT（労働総連合）の最大の地盤だったから、そこの代表、ニコラス・レドンド（現UGT会長）、ムヒカらと、セビージャ組とが中心になって改革派の主張をまとめ、説得力に定評のあるゴンサーレスが大会でそれを発表することになった。

シュレーヌではフランコ体制との全面対決を主張する歴史派と、可能なことからひとつづつ民主化を実現しようとする改革派とが激論をたたかわし、後者が賛成多数をえた。書記長選挙では有力候補のレドンドが、自分は固辞してわずか33才のゴンサーレスを推薦し、最終日の午後になってからようやく後者に決定する。ただし正式の書記長ではなく、第一書記という遠慮した肩書きだが、いずれにしても社会主義インターナショナル史上では最年少の党首が生まれたわけである。おもな役員の顔ぶれも市民戦争の残党から学園紛争の世代へと大幅に若返った。閉会のとき、インターナショナルを合唱したあとの一瞬の沈黙のなかで「この次はマドリーだぞ！」という声がおこり、みんなが涙をこぼしながらこれを呼びつづけたという。たしかに次の大会はもう亡命先ではなく、フランコ死後のマドリーで堂々とひらかれることになった。

1975年11月、フランコの死の直後に即位した新国王フワン・カルロス一世はすぐには首相を更迭せず、一見いままでの体制をそのまま維持するかのような姿勢で、きわめて慎重に民主化への地盤を固めようとした。翌年7月に抜擢された若いスアーレス新首相も、もともとファランヘ系の閣僚だったから、はじめのうちは軍部も右翼も安心していたらしい。11月にはフランコ時代いらいの勅撰議員たちが、政治改革法案を可決したが、これは実は彼ら自身の権力の土台を取りはらってしまう革命的な法律だった。いままでの制度や法律のわくのなかから新制度をつくりだすという体制内改革派の戦術のおかげで、あまり激しい抵抗もなく民主化への方向転換が実現したわけである。次の課題はこうした漸進的改革をどの程度の速度で、どこまでひろげるかという一点にかかってくる。

12月なかばにマドリーの都心部のホテルで前代未聞の盛大な社会党大会がひらかれた。国内各地の党員代表二千人が会場につめかけ、来賓席からは西独のブラント前首相をはじめとして、ヨーロッパ、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国の社会党々首が次々に立ちあがって、スペインの同志たちへの祝賀、激励の辞を述べた。これほど賑やかな大会を計画し組織したのはゲッラである。経費そのほかどんなに無理を重ねてでも、ぜひ盛大なものにする必要があると判断したのだろう。

ちょうどそのころスアーレス政府は政治活動の自由化をめぐって、微妙な立場に追いこまれていた。翌年に予定されている40年ぶりの総選挙を、うわべだけでも民主的と見えるものにするためには、政府としてはすくなくとも社会党を合法化して正式に選挙に加わらせねばならぬ。しかし社会党のほうは、合法化なら共産党もふくめなければ意味がないと主張して、個別交渉に応じない。スアーレスは進退きわまったかたちである。共産党まで認めれば軍部と右翼とが即座にクーデターをおこすかもしれない。認めなければ社会党ぬきの総選挙になって、国際社会の嘲笑を買ってしまうだろう。しかもその国際社会の代表的な顔ぶれがいまマドリーに集まって、スアーレス政府の動向を至近距離から見守っているのだ。

翌年春には共産党もどうやら無事に公認され、6月15日の総選挙はすべての政党が参加する公明正大なものになった。結果としては社会党が投票数の28.7パーセントを獲得して野党第一党。ユーロ・コミュニズムの提唱者カリージョの共産党と、かつての情報観光相フラーガの民衆同盟（AP）と、左右両翼はそれぞれ9パーセント前後。与党の中道民主連合（UCD）は31.3パーセントだが、これではAPと連立しても少数弱体政権だし、社会党との連立は右翼が承知しないだろう。スアーレスはやむをえず単独政権をつくり、おもな野党のすべてに閣外協力を求めて、67年10月末にはモンクローア協定なるものが調印された。

それからひと月あまりのちに東京を訪れたゴンサーレスは、この協定の主旨について明快な解説をしてくれた。

> フランコ独裁政権は1973年に起こった経済危機の深刻さを直視したがらなかった。またそれを解決するための措置を何一つ講じなかった。だから、やがてフランコが死に、民主化の過程がようやくはじまったときには経済危機は四年間も放置されて、すでに破産寸前の状態にあった。（中略）さしあたり、この状況を切り抜けるには、諸政党がそれぞれの目標や要求の一部をしばらく棚上げにして、政府と協力するしかなかった。これがモンクローア協定の経済的理由だ。当然、民主体制の基盤強化という政治的理由もある。先日、私は国会でこのことを次のように説明した。「民主政治が経済危機を終らせなかったら、経済危機のほうが民主政治を終らせてしまうだろう。」

4　野党から与党へ

フランコ以後のスペインでよく耳にする流行語のひとつは「パビーアの馬」であった。パビーアという将軍は1874年1月にマドリーの議会を武力で解散させ、スペイン第一共和制をわずか一年の短命に終らせた人物だが、そのとき彼が、馬で議場に乗りこんだという伝説がひろまったため、いまだにこれがスペインふう極彩色のクーデターの原イメージになっているらしい。

たしかな事実はスペインの第一共和制がパビーアによって、第二共和制はフランコによって、どちらも武力でつぶされたことである。とくに後者の場合、そのために悲惨な長い内乱がおこっただけに、何としてでもあれだけは二度とくりかえしたくないというのが大多数の国民のコンセンサスになっている。フランコ以後の歴代の政府が漸進的民主化をすすめるにあたって、たえず気にせねばならないのもクーデターの赤信号だった。

共和国派への大赦令、共産党公認からシビリアンの国防相任命まで、軍事独裁のおもな支柱が次々に取りはらわれてゆく過程のなかで、軍の過激派は何度となくクーデター計画をつくったり、練りなおしたりしていた。右翼はそれをちらつかせてスアーレス首相を脅迫し、スアーレスは野党々首ゴンサーレスらに自制の必要を訴える。社会党や共産党は逆に労働組合とか、国際世論とかを後ろ盾に圧力をはねかえそうとする。フランコ以後の新らしいスペインは、基本的にはこうした押し相撲の土俵のうえで成長したと言えるだろう。

おなじような力くらべは社会党をふくめて、どの政党内部でもたえずくりかえされている。1979年5月の社会党大会ではゴンサーレスが、綱領のなかから〈マルクシズム政党〉という定義を削ろうと提案し、それが否決されたとき、さっさと党首と辞めてしまった。党員たちはあわてて鳩首協議したが、どう考えても彼に代わりうる党首候補が見あたらない。やむをえず9月に臨時大会をひらいて、もういちどゴンサーレスらの主張をよく聞いてみることにした。

その大会ではまずゲッラがこんな話をした。「そろそろパビーアの馬が議会にとびこんできそうだと思ってるひともいるようだが、私に言わせれば今回はスアーレス自身がその馬に乗っているのかもしれませんよ。」これにつづいてゴンサーレスは、「私の耳にいろいろと不穏な情報が伝わってくるが、その具体的内容はこの席でも、おそらく近い将来にも公表できない」と断ったうえで、いささか神託めいたせりふをつけくわえた。「権力は情報をあたえるし、情報を蓄積することによってますます権力を強化するが、その権力とはつねに保守的なものである。」これを単純に解読するには、〈権力〉を〈諜報機関〉とでも置きかえてみるべきだろうか。

けっきょく臨時大会はゴンサーレスらの主張をほぼ全面的に承認し、社会主義の発展に役立つすべての理論をマルクシズムと同格にあつかうことになった。論争の過程で終始それを主張してきたムヒカは、この決定の意義について、「権威主義の伝統のせいで一方には反文化派、他方には教条的理論派と、両極に分解していたスペイン社会」がすでに変質しつつあること、いまの労働者や中産階級の広範な層とつきあうには理論的独善を捨

てる必要があったことを指摘している。この大会で社会党は階級政党から大衆の党へ、そして野党から与党への準備をととのえたことになる。党首に復帰したゴンサーレスの指導力も、党内の結束もこのときの試練をつうじて強化された。

翌年1月にスアーレス首相がとつぜん辞職した。軍部が彼を追いつめて辞めさせたという噂だったが、真相はよくわからない。実際にパビーアの馬がとびだすのは2月23日。後任の首相をえらぶために閣僚や議員が国会に勢ぞろいしたときであった。

その夕方、議事堂のそばの研究所にいた歴史学者のひとりが窓のそとを見ると、4台のバスに乗ってきた武装警官の一隊が議会を包囲しはじめた。「あれは何だろう？」と同僚にきいたら、「パビーア・1981年版」という答が返ってきた。たしかにそのとおりだった。機関銃をかかえた警官たちが議場になだれこみ、そこにいた閣僚、議員をぜんぶ人質にしてしまう。指揮官テヘーロ中佐はすぐ電話室に行って、首領株の将軍に作戦の結果を報告した。「もしもし、こちらパビーアです。万事終了。異常なし。」

さいわいにしてこのパビーア二世の蜂起は失敗に終った。勝負の分かれ目になったのは若い国王フワン・カルロス一世が軍服姿でテレビの画面にあらわれ、民主制の擁護を国民に訴えて、軍部をおさえたことであろう。孤立したテヘーロ隊は次の朝には投降し、閣僚も議員もまる一晩議場に監禁されただけで、全員無事に解放された。与野党の代表が王宮にお礼を言いに行ったとき、フワン・カルロス一世はこう警告したという。「こんどこれが起こったら、もう私では停められない。みなさんよく気をつけてください。」

この国王のおかげで火事がひろがらないで済んだのは、このとき一回かぎりではない。フランコの死の直後には、保守派はみんな新国王に旧体制の擁護を期待していたし、国王も一見そのような姿勢のままで、軍部とのつきあいを深める努力をつづけていた。陸海空軍の学校での彼の旧友たちはすでに中堅将校だから、いざというとき実際に部隊を動かすのは彼らである。中道派や左翼の政党、政治家は一般に軍とのつながりが薄い。シビリアンの国防相にも適任者がなかなか見つからない有様だった。若い国王がいなかったらパビーアの馬はもっと早く、もっと激しく荒れ狂っていただろう。

テヘーロ事件の洗礼のもとで発足したカルボ・ソテーロ内閣（やはり中

道右派）が、とりあえず実現を急いだのは北大西洋条約機構（NATO）への加盟である。軍事独裁の維持という使命をうしなった軍隊に新らしい目的をあたえるため、そして軍の内部にいる近代派、民主派の発言権を強めるための緊急措置だったろう。軍部にとってNATO加盟は、財界にとってのEC加盟とおなじように、ほとんど唯一最大のコンセンサスだし、政府を支持するかしないかを左右する重要な要求事項だった。

1981年の秋、政府のNATO加盟案が議会に提出されたとき、社会党は激しくこれに反対したが、保守派の賛成多数によって可決された。翌年10月の総選挙のときにも、社会党の公約にはEC加盟、失業対策（8万人の新雇用をつくること）などと並んで〈NATO脱退のための国民投票の実施〉という項目があった。

この選挙では社会党が議席の過半数（202）を占め、ゴンサーレスの社会党単独政権が誕生する。中道民主連合（12）と共産党（4）は完全に没落し、フラーガの保守党AP（106）が野党第一党になった。いままでの群雄割拠から二大政党時代に移った感じだが、議席数の差やゴンサーレスの人気のほどを考えると、むしろ社会党独走にちかい。4年後の次期選挙どころか、8年後にも保守党は勝てそうもないという声が財界にすら多かったという。

しかし社会党にとって、ほんものの試練はこのときに始まった。経済不況、失業問題、EC加盟の交渉そのほか、すべてがすべてと絡みあうそれぞれ複雑な難問題と同時に取りくまねばならぬ。議会での絶対多数を確保している単独政権の強みで、ゴンサーレス政府は薄っぺらなその場しのぎの政策ではなく、産業や行政機構の体質にかかわるような改革を幾つか実現することができた。ごく身近なことで言えば、国鉄の列車の発着時刻が以前よりずっと正確になったし、官吏たちは毎朝きちんと定刻に出勤しはじめた。同一人物が四つ五つと重要な公務を兼ね、何重にも高給を喰むような悪習も一掃されつつある。

もっと大きな重要課題は工業の体質改善だった。これまで主力になっていた鉄鋼、造船、繊維などはもともと不況に弱いうえに、アジア諸国の進出でほとんど再起不能の状態に追いこまれた。これをエレクトロニクスのような高技術、低雇用の業種中心に切りかえようとすれば、すくなくとも何年間かは失業者がますますふえるだろう。ゴンサーレス政府はそれを思いきりよく実行に移し、85年度あたりからはようやく効果があらわれて、

対外収支、インフレ、失業などがやや好転しつつあるという。しかし84年の失業率は西欧最高の20パーセント（約270万人）に達しており、8万人の新雇用などという選挙公約はけしとんでしまった。

こうしたマイナスの重荷をみんな直接に背負はされたのは社会党系の労働組合（UGT）である。人員整理、給料や年金の頭打ち、雇用条件の多様化など、組合の存在理由にかかわるような問題でたえず現場の不満をなだめ、政府に協力せねばならぬ。UGT会長レドンドが自分ではデモの先頭に立ったり、議会への政府提案に反対したり棄権したりしながら、ゴンサーレス政府とUGTとの正面衝突だけは避けようと努力する姿は、テレビで見てもこのところますます悲壮になりつつある。レドンドとゴンサーレスと、いずれ劣らず名声の高いふたりの指導者が象徴する社会党の――そして現代スペイン社会の――矛盾がいつ発火点に達するのか。さしあたっての山場はどうやらNATO脱退問題をめぐるこの3月の国民投票のときである。

スペインは86年1月からECの正式メンバーになった。この宿願をついに実現したことはゴンサーレス政府の大きな得点だったけれど、加盟交渉の途中では各国の利害が入り乱れ、きわどい駆け引きがくりかえされた。スペインのぶどう酒、果物、野菜などとの競走をおそれるフランスがきびしい条件をつけるのに対抗して、西ドイツやイギリスを味方にひきいれて条件を緩和してもらうというのが基本戦略であったらしい。加盟承認の代償としてゴンサーレス政府がEC諸国にどんな口約束をしたのか、その具体的内容はおそらく近い将来にも公表されない部分をふくんでいるだろうが、すくなくともNATO脱退というスペイン社会党の主張をやわらげることは、暗黙の了解事項ではなかったろうか。いずれにしてもゴンサーレス政府のNATO問題をめぐる姿勢は次第にあいまいなものになり、公約の国民投票もずるずる引きのばされていた。

スペインの防衛問題を中心にNATOのことを考えると、焦点になるのはジブラルタル海峡附近の三つの港町である。モロッコ側にはスペイン帝国最後の遺産セウタとメリージャ、イベリア側には英領ジブラルタル要塞が残っており、かねてからモロッコは前者、スペインは後者の返還をもとめていた。もしも将来それが実現するとすれば、両方同時でなかったらスペインの大衆感情も軍部もおさまらないだろう。しかしイギリス政府が後者を簡単に手放すはずはない。唯一可能な解決策はまず英領ジブラルタルを、NATOの共同基地というかたちに変えることだろうし、それにはスペインのNATO参加が必要不可欠の前提になる。セウタ、メリージャの問題にしても、社会党政権が成立したとたんにアメリカ軍は海峡附近でモロッコ軍との合同演習をくりひろげた。ゴンサーレス新政府のNATO政策にたいして、アメリカ軍部が具体的に露骨な警告を発したのだろう。

85年の後半からゴンサーレスはNATOにとどまるべきだというキャンペーンを開始した。86年2月上旬には国民投票をめぐる議会討論が連日テレビに映っているが、なんとも奇怪な風景である。社会党の闘士たちがNATO残留に賛成をもとめ、フラーガ以下保守派の領袖たちが棄権を呼びかける。どちらの政党の支持層にとっても不可解な、民主政治の滑稽さを笑うしかない事態だろう。とくに社会党の場合、いままで我慢をかさねてきた多くの支持者がNATO問題をきっかけに、はっきり不信を表明したり、離反したりしはじめた。2月2日からの新聞アンケートによると、社会党支持者の4割以上がNATO残留に反対している。UGTも意見においては反対だが、組合としての反対運動はしないという微妙な方針を決定した。

投票日は3月12日。ことが外交問題だけに投票結果は法的には政府を拘束しないけれど、もしも反対多数ならNATOを脱退する、とゴンサーレスは明言した。それがスペインの国内問題、ECとの関係、ジブラルタル情勢などにどんな変動をもたらすかは、神様も御存知ないだろう。ひとつだけはっきりしているのは、投票の勝敗を別にしても、フランコ以後のスペインにおける最初の安定政権が土台の部分からすこしづつ揺らぎはじめたことである。もっとも熱烈な、忠実な社会党支持者たちのあいだにすら深刻な割れ目があらわれたし、その原因は経済政策だけではなく、世界平和への貢献とか、軍備拡張競走とか、西欧における社会主義の存在理由にかかわる問題をふくんでいる。ゴンサーレスをかつて党首に推薦したレドンドは消極的反対。56年の世代のムヒカとタマーメスは、前者がNATO賛成派、後者は反対派の先頭に立って、それぞれ大規模なキャンペーンを開始した。長い目でみると指導者たちのそうした動向より重要なのは、社会の底辺部で民主政治や社会党政府への不信感がひろがってゆくことであろう。

ごく最近の新聞に旧軍人からの長い投書が二通あった。第一の筆者はフランコの死後まもなく軍隊内部の民主化をくわだて、軍籍を剥奪された九

人組の代表者。野党時代の社会党はずっと彼らを応援し、軍籍復帰を政府に要求していたが、最近とみに冷たくなり、国防相にいたっては露骨に彼らを厄介者呼ばわりしはじめた。第二の筆者は旧共和国政府軍の老兵のひとりである。フランコ治下で36年間の迫害に堪えたあと、ようやく大赦令が出た。社会党政府はフランコ軍の老兵なみの年金までくれるという。ところが実際にはこれにいろいろ細かい条件がつき、手つづきもひどく煩雑で、多くの場合にほとんど実現のみこみがない。筆者は幻滅と怒りと誇りを、こんな文章に托している。「このささやかな希望の灯が社会党政府のもとで消えつつある。私たちは今までどおりに生きて行くしかないのでしょう——さいわいにして共和国の理想だけは失わない敗残者の群として。」

〈追記〉　フランコ政権の末期から77年の総選挙まで、何度かの政変に関しては、むかし月刊『文芸春秋』に書いたので今回は何もかも省略した。それに関心のあるかたは同誌1977年8月号の選挙ルポルタージュ「スペインに吹いた自由の風」を参照していただきたい。

（在スペイン）

■日韓の現在と将来を考えるために

小川生治／池明観編　日韓キリスト教関係史資料　6800 〒350

池明観　破局の時代に生きる信仰　2200 〒250

成鎬泰　苦難の韓国民衆史　重版 準備中

閔庚培　韓国キリスト教会史　6000 〒300

和田春樹／清水知久編　金大中氏たちと共に　2000 〒250

金大中　最後の勝利をわかちあうまで　600 〒300

安炳茂　現存する神　700 〒280

戸利政博編　神社問題とキリスト教　4500 〒300

新教コイノニア 2　靖国公式参拝を批判する　600 〒200

新教出版社　160 東京都新宿区新小川町九—一　TEL03(260)6148